
不良少年、・・・になる

Leroy

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

不良少年、・・・になる

【Nコード】

N8428P

【作者名】

L e r o y

【あらすじ】

何で俺が異世界トリップしなくちゃなんねえんだ！ それに、はあ？ 勇者だとお？！ この不良の俺が？！ ふざけんなよ、バカヤロウ。俺以上に勇者に適任な奴は他におるわ。ちくしょう！！

どういう訳か異世界に勇者として召喚された主人公。彼はその世界で立派な勇者に・・・。
ふざけんなボケェ！

第一話 期待はずれも良いところだなア。先輩

これだから不良は楽しい。

俺は上から振り下ろすような拳を避けて懐に入り込み、そいつのみぞおちを蹴り上げた。くぐもった苦悶の声、同時に足の甲を踏みつけそいつの顎をすくい上げるように殴りつける。

そしてその打撃音とともに、そいつの体が宙に——浮かばない。殴った拳でそいつの襟首を掴み、自分の背後に回す。

予想通り、そいつの体越しにもろに当たったら重いであろう衝撃が伝わる。襟首を離し、後ろにあるそいつの体を足が地面に水平になるよう、押すように蹴った。

そして、前に跳躍し、この嬉しい騒動の当事者であろう人物を殴った。

かえるの潰れるような無様な声。俺の拳に当事者であろう人物の鼻血がついた。

ちなみに、俺の両手両足の先端は血まみれだ。

理由は簡単、今現在俺の周りにくたばっていたり立っていたりしている奴らの返り血だ。くたばっている奴ら合わせて俺を襲ってきたのは三十人程度。その半数はいまや、血の染み込んだコンクリートの上、もしくは俺の足元に転がっている。

その中の一人に足を乗せ、口笛を吹いた。そして思う。

——こいつら、だめだ。てんで弱すぎる。

こいつらに囲まれてここ、廃れた港の廃工場に連れてかれた時はどんなことになるのかと嬉々としていたが、今となっては幻滅し、ただただ襲いかかって来る奴らを地面に沈めるといふ単調な流れ作業。

あくびが自然と漏れ、俺は言った。

「期待はずれも良いところだなア。先輩」

その先輩の顔に朱がさしやがりました。

同時に地面を蹴る俺。瞬時にその先輩との間合いは消滅し、その直後にその先輩の顔がはじけた。原因は俺の拳だ。

その直後に、背後から太い風斬り音。後ろを見ずにかかとでその音源を弾いた。そして、俺は回転しその振り下ろしてきた奴の首に裏拳をきめる。

その反動の勢いで逆に回転し、鉄パイプを振り上げた直後の姿勢の奴に、鳩尾に肘、顔面に裏拳、首に後ろ回し蹴りと連続で叩き込む。

横合いから角材が来たので屈んで避ける。そいつに足払いをかけ、てこかし、崩れてきたそいつの顎をもう片方の足の爪先で蹴り上げる。そして、気を失ったそいつの襟首を掴んで、俺の背後から殴りかかろうとした奴に投擲する。

——これなら、頭で他の事を考えながらも勝てそうだ。

俺は体を動かすために使う思考を止める。すると、俺の体の体感速度が急激に下がった。前に一度だけこういう状態のときの自分をカメラで撮ってもらい見たことがある。

そのときの光景は俺が言うのもなんだがすごかった。なぜなら、自分の動き全てに感情が無く、ただ機械のように敵の急所を攻撃して一撃でしとめたからだ。

ちなみに、そのとき俺が見ていた光景は焦点が全くあっていなかったため、ほとんど覚えていない。

さて、自己紹介をしようか。

俺の名前は、鬼灯優介。ほおすき ゆうすけ 親は俺にどんな人にも親切に接するように、という願いをこめてつけたらしい。

・・・あー言うな言うな。自分が他人に優しくないってことは重々承知している。

何しろ、怪我をした奴の傷口に塩をふりかけることをしたことがあるしな。まあ、その時はたまたま偶然塩を持っていたからだがな。

・・・話がそれた。

高校二年、十七歳、不良。でもなんだかんだ言って勉強はきちんとこなしているためか成績は割と良い方だ。

未だに家族と住んでいる。俺は一人暮らしをしたいのだが、

「ゆーちゃんみたいな可愛い子をまだ一人にはさせられません」

と、見当違いなことをにつこりと笑って言う母、

「それにゆうは放っておくと何をしでかすかわからんからな」

と、ものすごい正当な意見を父が言ったため却下された。

ついでに俺の家族の紹介もしておこう。あと、俺は両親の年齢は知らん。

母の名前は鬼灯優^{ほおずき ゆう}。身長は百五十？ほど、後ろに束ねた黒髪に、やや垂れ気味の眼といかにも優しそうな顔立ちをしている。

子供が大好きで、結婚する前は幼稚園の先生をしていたらしい。その頃はものすごい人気があり、また、優れていた先生だったそう。でも時々、他の幼稚園の先生や教え子やその親達が老若男女を問わず相談に來たりする。

父の名前は鬼灯厳介^{ほおずき げんすけ}。身長は百八十？ほどのがっしりとした大男。前頭部辺りが禿げているがそれを隠そうともせずオールバックにしており、厳つい顔立ちをしている。

警官のような雰囲気が出ているくせに職業は塾の数学講師。母と同じように人気があり、よほど相性が良かったのか勉強嫌いの不良を更正し、その上数学だけだが好きにしたということがあったとか。無論、俺はならなかったが。

父と母はどちらとも賢く、優しい人柄だ。だがどういいうわけか、

俺はただ両親に顔立ちが少し似ているというだけで、

「本当にこの人たちの子供か？」

と言われるほど、俺の性格は両親に似ていない。目は両親と全く異なっているが。

そして、あと一人、俺には家族がいる。

それは――

「ゆう！　夕飯の支度ができたから早く帰るわよ！」

姉だ。

工場の馬鹿でかい扉を大きく開け放ち、そこでバックに赤い光を浴びながら胸を反らして仁王立ちしている、どこか神々しさのある演出をしている女性。

俺は知らず知らずのうちにため息をついてしまった。

奴らが叫ぶ。

「おい！　あいつを人質に取れ！　野郎共！」

「「おー！！」「」

――骨の一本はやられるな。あいつら。

姉の名前は鬼灯優輝^{ほおずき ゆうき}、二十歳、大学二年。時間が無いので、いつ

も俺が思つことで説明しよう。こいつの下の名前は『勇輝』にして
もなんら遜色の無い勇ましい奴だ。

正直、男の俺より強い。

第二話 上等だ・・・！

姉はパンパンと手を叩く。

「ざっとこんなもんね。ゆう、帰るわよ」

「ゆき、やりすぎだろ。これ。あいつらが通報したら大変なことになるぞ」

俺の家族は姉のことを、ゆき、と呼んでいる。

ゆきはフン、と鼻を鳴らした。

「大丈夫よ。男は変に自尊心が高いから、年上とはいえこんな弱い女にやられたなんて口が裂けても言えないわよ」

——どこが弱い女だ。

俺はがつくりと肩を落とす。

毎度思ふことだが、ゆき、こいつは男なんじゃないか。

「少しは自重しろよ・・・」

俺は小声でぼそりと呟いた。

「何か言った？」

「何も」

素っ気無く答え辺りを見渡す。そこには生きている屍が転がっていた。

ある者は血を吐いて、ある者は関節が色々なありえない方向に曲がっていたり、ある者は血を吐き関節が曲がっている。地獄絵図、もしくは死屍累々という表現がぴったりの光景だ。

血を吐いている奴らは俺、関節が曲がっているのはゆき、その両方は俺に血を吐かされた後、ゆきに関節を折られた奴だろう。

自業自得とは言え、少々憐憫を感じる。

俺は改めてゆきを見た。

肌は白く、肩まである長さのお世辞抜きで綺麗な黒髪に、少し吊り上った良く言えば凛々しく悪く言えばきつい感じの黒い瞳のある眼、口と鼻そして眉もずっと筋が通っており、どれもが一級品のパーツだ。顔立ちは整っていて凛々しく、格好良い美女ってところか。

身長は母より高く、百六十？ほど。スタイルは痩せ型で足が長く、体の起伏はいたって平均的。

服装は足が長いことを強調するような藍色のジーンズに、スポーティーな青の色合いの半そでのシャツ。

——元気があって、よろしいことで。

俺はまたため息をついた。化粧はせず、服装はかなり適当なくせにそれが妙に似合っている。

ゆきはそんな俺を見て眉を吊り上げる。

「何よ？　ため息なんかついちゃって。幸せが逃げるわよ」

「ゆきには一生わからないことだ」

「あつ。馬鹿にしたな」

「してねえよ」

俺はズボンのポケットに手をつ突っ込んで歩き出した。

工場の入り口近くに投げ捨てていた自分の学生かばんをひったく
るようにつかみ、肩にかける。

夕日は今まさに水平線に沈もうとしていた。

「きれいな」

「・・・」

ゆきの言葉に俺は沈黙で肯定する。もつとも、後ろにある屍のこ
とを考えなければ、だが。

俺はため息をつき、海に近い我が家への帰り道を歩く。その間、
ゆきが色々喋っていたが無視した。

家に着くと、ゆきが真っ先に家に入った。俺は家に帰るまでのそ
のままのペースで家に入る。

「ただいまー」

「・・・ただいま」

靴を脱ぎながらゆきにつられて言う。

人二人は優に入るほどの玄関を見るとおり、両親の家は広い。家族四人で住んではいるものの、空き部屋は多いため、小学生の頃は良く友達をよんで遊んだりしていた。

「おかえりー、ゆーちゃん、ゆき」

「おかえり」

底抜けに明るい母の声と、少し重い感じのする父の声。

——説教かな。

俺は内心でため息をついて玄関にかばんを置いて部屋に入る。

「ゆづ、そこに座りなさい」

案の定思ったとおりだった。

「何だよ」

内心、さつさと飯を食って寝たいのを堪え、父の前に座った。

「ゆづ、何でわかるか」

「わかるわけないだろ」

即答し、背中を椅子の背もたれに預ける。

「また、喧嘩したんだってな」

「ああ、したさ」

——それがどうしたってんだ。

「お前そろそろ喧嘩をさけようとはしないのか？」

父はため息混じりに言った。

「決まってる。しないね。する気もない」

父は下に顔を向ける。そのため、今までの苦虫を噛み潰したような父の表情が見えなくなった。

「何でだ？ お前は喧嘩をするとこさえなくせば悪いところは何も無いのに」

「俺がこういう時なんて言うのかわかってんだろ？」

意地悪く問い返す。

「・・・優介、今から言うことは本当の話だ」

父の声から感情が無くなった。

「・・・何だよ」

ゆきと母の明るい会話が遠くなる。

「・・・お前と喧嘩をした奴が、お前の与えた怪我のせいで死んだ」

「それがどうしたんだよ」

俺はすぐに返事を返した。

父は顔を上げた。その眼は俺を、信じられない、とても言いたげに俺を凝視した。

「俺は売られた喧嘩を買っただけだ。むこうがふっかけてきた喧嘩だろ？　俺はそれを返り討ちにした。それだけじゃねえか」

大体、喧嘩をふっかけたら怪我なんざ当たり前だ。それがもとで死んだのなら、ただ、そいつが弱いから。それだけだ。

法律は弱者を守るためにある。しかし、俺達不良はそれを破る。そんなはみ出し者に世間の常識を当てるなんて間違っている。

法律や世間の加護の無い世界は弱肉強食。そいつが死んだのならそいつのせい。ただただそいつが弱いだけ。死にたくなかったらそんな世界にわざわざ来るなっつー話。

父の眼がスウツ、と細められた。

俺は続ける。

「向こうが悪いんじゃないか。それで俺を恨むのは畑違いだぜ」

次の瞬間、俺の視界は明滅した。

気づいたときには俺は柱に頭を打ち付けていた。

「ちよっ、お父さん!？」

「ゆき、静かにしなさい」

何が起こっているのかわからない。俺は目の前にいる父を見上げている。

「優介、俺はお前を勘当する。明後日までには家を出て行きなさい」

「・・・てめえ、俺を殴りやがったな」

俺は理解すると同時に腹の底でふつつと湧き上がる怒りと共に立ち上がる。

「ゆう! 止めて!」

「ゆきは黙って・・・」

次の瞬間またも視界が明滅した。

「上等だ・・・!」

俺は父に殴りかかった。父はそれをいとも簡単に掴んだ。

「人の娘を呼び捨てにするな」

父の声は無感情だった。

俺は父の体が大きくなったような錯覚に陥った。その刹那、俺の腕が擦じ上げられる。

「がつ・・・!？」

体が宙に浮いた。俺の視界はぶれて、周りの景色が流れる。宙に浮いた浮遊感がなくなると同時に、俺は床に叩きつけられた。

肺が圧迫され息が詰まる。

「お父さん!! ゆう!!」

腹を蹴られた。俺の体は何かにつかって止まる。

ガチャリ、という音がして、再度腹を蹴られた。

俺の体は二転三転し、止まった。

「ゆう!!」

ゆきの声が最後に聞こえた。

俺の体から力が抜けていく。視界も暗くなっていく。

夕日はもう、闇に沈んでいた。

第三話 俺は、気がついたら、ここに、居たんだよ。そして、てめえらに、巻き
後頭部にいきなり鈍い衝撃がはしった。

いつの間にか立ち上がっているという不思議は無視して、後ろに
視線を向けた。そこにいたのは、変な鎧を着たコスプレをしている
奴。

「つざけんな！」

俺は叫び、男を蹴り飛ばした。しかし、男は揺るがない。

——無駄に鉄の鎧なんか着込みやがって！

男は俺を殴ったであろう血のりのついた鉄の・・・剣？！

「ふざけんなア！？」

俺の攻撃はくらわないと理解したのだろう、鉄の剣を大きく振り
上げた。

俺は剣の腹を側面から爪先で蹴りつけた。その後、その右足を左
に引き込んで剣の先を地面に向けさせる。

奴の力は無駄に強い。俺はそれを利用して、体を剣に乗せた右足
を基点に旋回し、左足のかかとでフルフェイスのかぶとを横に蹴り
つける。

奴の体がぐらつく。

「疾っ！」

鋭く息を吐き出し、右足を振り上げ、鉄のかぶとを蹴り上げる。左足で着地して、左腕を後ろに引き腰を捻る。

右足を強く引き込むように着地させ顔の前に構えた右腕を右斜め下に引き込み、奴、男の顔に左の拳を全力で振り切った。

狙いを違えることなく、男の顔に拳がめり込み気絶させた。

「かれ！」

周囲にも同じように完全防備した奴らがいた。俺は嬉々とし、そいつらのひざの裏を蹴りつけて、俺よりも高い位置にあるかぶとを被った馬鹿面を、差し出させる。

「ラアッ！」

かぶとを蹴り上げ、無防備になった予想通りの呆けた馬鹿面に、拳を打ち込み意識を奪う。

なかには俺の攻撃を防ぐ奴もいたが、そいつには仲間の体を大量に投げつけて押しつぶした。

しばらくして、周りの奴らは全て地に伏せていた。

俺は息をゆっくりと吐き出し、周囲を確認した。そして、啞然とする。

「・・・貴方が勇者様？」

声が聞こえたので、俺はその声の主に体を向けた。

その声の主の顔は青白く、そしてその顔で弱々しく微笑む。

「・・・私の名前は・・・スノ。よろしくね、勇者様」

その声の主は血を流していた。

「・・・勇者様、貴方の・・・お名前は」

声の主である少女はそう言つと気を失った。

俺は焦ったが、冷静に少女を寝かす。

——斬られたのか。

腹部からべつとりと滲む血が眼にはいった。

少女の着ているのは純白の簡素な・・・ドレス？　それも、中世ヨーロッパの貴婦人が着るような。

俺はそのドレスを血の滲んだ箇所だけ、そばに落ちてあつた剣で慎重に切り取った。傷口は広いが、幸いにも浅い。

きよろきよろと辺りを見回す。さっきのコスプレ野郎の着ているよろいの下から、群青色の布がはみ出ているのが見えた。

俺はよろいをそいつから無理矢理脱がす。

——重っ！

脱がし終えたときには肩で息をついていた。

——ちくしょう。

心の中で舌打ちし、そいつから群青色のシャツ・・・、汗だくじやねえか！　こんな不潔なものを人の傷口に誰が当てられるか！

ちらりと少女の顔色をしてみる。汗は滲んでるし、顔面蒼白、一刻も早く治療しないと大量出血で死ぬだろう。

仕方無しに俺はシャツを脱ぎ捨て、それを引き裂き、横に長い長方形に切り取る。そして余った布で少女の血をふき取った。

切り取った布を包帯代わりに少女に巻く。俺は喧嘩でしょっちゅう怪我をしその度にこういうことを自力でしたので慣れている。

巻くとき、少女がうめいたが気にしない。

——さて、と。

本当はこのままでいたいのだが、いつか兵士の格好をしたやつらが始まるだろう。

俺は鬱屈とした気分で、奴らの装備を外し、そいつらをそこらに落ちてあった縄で一人一人別々に縛る。

そして、その中から号令を下したと思われる奴の額を蹴りつけた。

「っ！」

「いよう、コスプレ隊長」

俺はニヤニヤしながらそいつの顔を覗き込んだ。そいつの顔に少し動揺の色が見られたが、そいつはすぐにそれを取り繕い、俺を睨みつける。

「・・・誰だ貴様は・・・?!」

金髪碧眼の厳つい顔のおっさんはもったいぶるように、重々しく口を開いた。

「てめえから名乗れよ」

見下しながらそいつに自己紹介をするように促す。

そいつはギリッ、と歯軋りをし、あたりを首だけで見渡す。どうやら馬鹿ではないようで、この状況は眼の前にいる俺が圧倒的優位だと悟ったようだ。

そして、重々しく口を開いた。一言一句を噛み締めるように。

「・・・スノウライト・シュー王女捕特別臨時縛部隊ウェイ国大隊長アベル・タッカー」

・・・・・・・・

・・・・・・・・

・ ・ ・

・

・。

「あいつの名前はスノウライトか」

「・・・貴様」

なんやら大隊長が怒りのオーラを噴き出しているが無視して質問する。

「で、ここはどこだ」

大隊長が間抜けな、しかし完全に俺を馬鹿にした顔をしやがりました。俺はイラッ、ときてそいつのあごを掠めるように蹴った。

そして、俺はその蹴りに怯んだ大隊長に詰め寄った。

「俺は、気がついたら、ここに、居たんだよ。そして、てめえらに、巻き込まれたんだよ。バカヤロウ」

以下、大隊長に数時間にも及んで話させたことをまとめたもの。
箇条書きで記す。

・ここは俺のいた世界とは違う世界。この世界の名前は『アース』。

・アースにはいくつか国があるが主な国は『ウェイ』『キルア』『シユー』の三つの大国。

・ウェイ・・・北方に広がる最も国土の広い国。東西に広い。

・シユー・・・西南方に広がる三大国のうち最も国土の狭い国。

・キルア・・・東南方に広がる国。

・文化レベルは中世ヨーロッパ。しかし、なぜか鉄道はあるようで、進んでいるのか進んでいないのかわからない。

・魔法が使える。魔法のことに關しては聞いてもチンプンカンプンだったので、後に記す。そこつ、俺に——事実そうだが——理解力が無いだと言うな。

ちなみにここはウェイとシユーの国境近くらしい。それも結構な田舎の。

・・・こりゃ完璧に異世界トリップだな。スノの言葉を聞いた限り、俺は勇者として召喚されたらしい。ふざけんな。

俺はふと、思った疑問を口にする。

「何で、シユーの姫さんがこんな辺鄙な所にいるんだ？」

大隊長はまたしても俺を見下すような目をした。ので、次は蹴つてやった。

——おつ、こいつ結構良いリアクションとる。

「我が国がシユーを打ち破ったからだ」

「へえ？」

俺の口と眉が自然と同時に吊り上った。

大隊長は誇らしげに胸を張り、続ける。

「我が国ウェイはシユーに対し破竹の勢いで進軍した。それはそれは奇烈で勇ましかった。シユーの者共はそんな我らの勢いに恐れをなし、降伏した。我が国の王は大層慈悲深いお方で、シユーを滅ぼさず、敗戦国にとっては破格の条件の条約を結ばせ、更には同盟を結ばれた」

大隊長はここで苦々しい顔になる。

「しかし、スノウライト・シユー王女はそれに感謝もせず、レジスタンスを結成し我等に刃を向けたのだ」

「へえ？ でもそんなことをしたのに、捕縛ったあ甘えな」

大隊長はまた誇らしげに胸を張った。

「私もそう思った。しかし、我が王は『反逆者とはいえ同盟国の王女。今回のことは、確実に誰かにそそのかれたのだ。手荒に扱うことは許さぬ』と仰り、大臣達がどれだけ反論しようと、反対する大臣達を抑え、慈悲深く、立派に捕縛に押し止められたのだ」

この大隊長、心の底からウェイ国王に陶醉しているな。

しかし、あの姫さん。敗戦国の姫なのだからもう少し大人しくしてろっつうの。

「それは立派だな」

「だろう！」

大隊長は目を輝かせ、前のめりになった。俺はその迫力に一步後ずさる。すると、大隊長が前から顔を打ちつけた。

「・・・興奮するな」

大隊長は顔を打ち付けたことは意に介さなかった。

「それよりも貴様、さっさとこの縄をほどけ。貴様が異世界から召喚されたのはよく解った。われらに対する暴行は不問としよう。それに貴様は、この世界のことはまだ右も左もわからぬだろう？我が国王は優しいお方だ。貴様をきつと客分、いや、貴様は強いから何らかの職に就けてくださるだろう」

大隊長はそこまでを一気にまくし立てた。そのせいか、今はゼエゼエと呼吸が荒い。

・・・そうだな。実際問題、俺はこの世界にはいない人間だ。戸籍もないし、この国の知識も無い。俺はちらりとスノに眼を向けた。

あいつの顔を思い出してみる。あいつは俺を視界におさめると明らかに安堵していた。同時に歓喜もしていた。たかだか一人の人間を配下におさめただけするような反応ではない。

俺は顔を戻し、大隊長の顔を見た。

大隊長の顔には何か期待するものがあつた。

俺はニヤリ、と知らず知らずのうちに笑つた。

第四話 ふうん・・・、って、はぁ?! 俺は男だぞ。何で男が王妃になんだ

俺は少しの間呆然とした。なぜなら、今、眼の前に広がっているのは、壮大な光景だからだ。

歴史の教科書で見た中世ヨーロッパとそっくりの町並み、それだけなら別段驚きはしないが、普通ではありえないような現象が起きているからだ。

「・・・すごいな」

思わず感嘆の声を漏らした。

すると、隣にいた大隊長が誇らしげに言った。

「そうだろう、我が国の魔法文化は他の魔道都市にはどうしても引けをとるが、魔法を使った華やかさは世界一と自負している」

たしかにすごい。

「しかも、今の期間は戦争に勝利したからな。国を挙げての祭りを行っている」

辺りを見回すと、色取り取りの動物が動いている。炎の鳥、水の魚、土のドラゴン、電気の蛇・・・ではなく龍等、魔法が駆使されて動物をかたどっている。

今現在、俺はウェイの首都ウェイにいる。理由としては、シュー王女の捕縛に関しての参考人及び、大隊長推薦の軍人だ。

そうして俺は連行・・・されている？ 俺は今馬に乗っているの
でそうは言いがたい。ちなみに、あの服はもう使い物にならないの
で適当な麻布で作った服・・・とはとてもいえない物を身につけて
いる。

途中の関所で馬車馬を換え急いでここにきたので半日で着いた。
その間、教えてもらった魔法に関することをここで記しておこう。

魔法は大きく分けると二つに分類される。一つは属性魔法、もう
一つは無属性魔法。まず、属性魔法の説明を記す。

属性魔法の種類は、炎、水、風、土、雷の五つの基本属性と、光、
闇の二つの特殊属性。そして、聖、邪の二つの概念属性の三種類が
ある。

基本属性はそれらを発現させて操り、それぞれの属性の特性を利
用して、攻撃をしたり防御をする。

そして、特殊属性と概念属性は・・・よく分かっていないそう
だ。そもそも、この二種類の属性を使える人は少ない。概念属性に
おいては、使える人は世界中を探して一人か二人いれば多いほうだ
という。

一応、この二種類の属性において分かっていることを記す。光は
活力を与え、活性化させる。闇は活力を奪い、物体を消滅させる。
聖と邪は・・・、基本的に何も無い。ただ、プラスかマイナスのよ
うなものだ、と言われている。

正直、よく分からん。まあ、それは置いておく。

次に、無属性魔法。これは、創作魔法、操作魔法、召喚魔法の三種類がある。まあ、これは名前のまんま。んでその中で判断しにくいものを一つ例に挙げる。

操作魔法は物質を動かす魔法、の認識であっている。のだがこれには医療魔法も当てはまる。これはよくあの三種類の魔法と同列に間違って扱われることがあるらしい。操作魔法に関しては色々議論され、魔法学——魔法に関しての学問——で最も研究者が議題に挙げることの多いものである。

ちなみに、無属性魔法は誰でも使え、属性魔法はその人個人個人の資質によって使えるものと使えないもの、もしくは得意なもの不得意なものがあるそう。このような差はどんなに偉大な魔法使いでも抱えている。

あと、魔法を使うために必要なのは、無論、魔力だ。

突如、歓声が沸き起こった。驚き、その方向に眼を向ける。

「お、あの魔^{まぎ}曲^{よくし}士か。ホオズキ、良かったな。あれは世界一の魔^{まぎ}曲^{よくし}士グレンタリスだぞ」

魔^{まぎ}曲^{よくし}士とは、魔法を使った見世物をする職業のことだ。俺の感性でだが、元の世界でいうと、サーカスカ手品をするような人だ。

「へえ？ 見に行ってもいいのか？」

「今は無理だな。・・・いや、今日の夜、あいつはこの宮殿に呼ばれている。お前がもし、国王様に気に入られたらそこで会えるか

もしれんな」

「めいっばい猫でも被るか」

「だとしたら、お前は王妃になるかもしれんな」

「ふうん・・・、って、はあ?! 俺は男だぞ。何で男が王妃になんだよ!」

「は?」

大隊長は俺の言葉を聞いて素っ頓狂な声をあげた。なんか、って
いかものすごいイラッ、ときたのでそいつの背中を思いっきり
殴った。

本当は顎に思いつき蹴りを入れたいのだが、馬に乗っているた
めそれはできなかった。ちくしょう。

「何で男言葉を喋って、三白眼で、髪が短い上に、胸の無い奴をど
う見たら女なんだよ! ふざけんのもたいがいにしろ! バカヤロ
ウ」

ここで俺の体格、及び容姿について説明しよう。日本人なのでも
ちろん、黒い髪に黒い瞳。髪型と目つきは先程言ったように短髪に
三白眼。あと、非常に言いにくいことだが、俺の身長は150cm、
その上童顔なので、パツと見、小憎たらしい中学生だ。ひどい時に
は小学生に間違われ、親切なお婆さんに、

「ボク、買う切符の種類を間違えてるよ。ボクのはこれだよ」

と言われ、子供用の切符を渡されたことがある。その時は不覚にも、怒鳴ってしまった。未だにそれを思い出すと、あのお婆さんに謝りたくなる。

とりあえず、俺の歳は十七だ。どう間違っても俺は女には間違われないはずだ。

——・・・自分で言っけて悲しくなる。何が悲しくて心の傷を抉り返す必要があるんだ。

「・・・お前、男だったのか!？」

俺の後ろで馬を走らせている奴が声をあげた。それは連鎖し、周リから、「嘘だろう?!」という声が全体からあがった。

さすがにキレた。

「全軍止まれ! そんなに言うなら、証拠を見せてやる!」

俺は止まった馬の上で立ち上がり、ズボンと下着を脱いだ。途端、周リから声がやみ、全員が眼を背けた。

俺は不思議に思い、見てみる。そこには、・・・何も無かった。

第五話 服・・・着なくて良いんですか？

その日、大体長達が気を遣って、俺を近くの宿に一人で泊まらせてくれた。そこで俺は男泣きに泣いた。

なぜなら、俺が男から女に変わっているのだ。

——一度もやったことねえのに。

主にそれが理由だけれども。

俺はひとまず落ち着き、ため息をついた。もはや女に変化したことは何も言つまい。次の問題は・・・。

俺は鏡を覗く。そこには黒い髪に黒い瞳の目つきの悪い変わらな
い俺がいる。あくまで体の性別が男から女になっただけのようで容
姿にはそんなに変化は無い。あるといえば、少し顔つきが優しくな
ったぐらいだ。

次の問題は、俺の年齢が十三歳になっていることだ。これは、年
齢をあてることのできる魔法によって正確にわかった。

身長も少し低くなっていた。今は140cm位か。

——魔法つてのはつくづく便利だな。

鏡の中の女は自嘲的に笑った。まあ、実際自嘲しているしな。

「はぁゝあ・・・」

俺はベッドに横になった。何気無しに部屋を見渡す。

木で作られた無骨な部屋にあるのは、部屋に合うように作られた
としか思えない机と椅子にベッド。安い宿だがそれなりに清潔感
はある。

俺から自然とため息が漏れる。そんな俺の耳に高い音が・・・声
だな。俺は跳ね起き、部屋の扉を開け放つ。

外の陽はもう沈んでいた。到着したのは昼ごろで、俺が泣いて六
時間はとくに経過しているようだ。

そして、窓枠に足を引っ掛け、

「よっと」

一つの声と共に屋根へと上がる。

俺は辺りを見渡した。眼にはいるのは中世ヨーロッパの町並み。
家はどれも石で造られている。俺は少し離れたところにある木製の
家・・・とはいえぬ小屋の密集しているところに眼を凝らした。

俺の体は俺が認識するよりも早く動き出していた。民家の屋根を
蹴って、木製の一つの小屋の屋根に着地する。俺は知らず知らずの
内に顔に笑みを貼り付けていた。

小屋の高さはそんなに高くない。俺はそこから飛び降りた。

ザンツ、と足元で音がした。その着地点周辺にいた男達が振り向

いた。

「お楽しみのところ悪いな」

男達がそこで何をしているのかは、明白だ。強姦しているのだ。俺は男達の隙間から襲われている女を見る。

俺はヒュウ、と口笛を吹いた。

「なかなかの上玉だなア」

女は遠目からでも分かるほど、端正な顔立ちをしていた。

女はあと少しで下着を脱がされるところだった。女は男達に壁に押さえつけられている。その男達の足元に眼をやると、襲われるまで女が身につけていたであろう物が切り裂かれて置かれていた。

女は最初安堵したような表情になったが、すぐに先程と同じ、絶望した表情に変わる。

男達は俺を男だと思っているようで——もしくは少年——俺を見た途端、気を緩めた。

しかし、その気の緩みはすぐにただされる。

「お前らには持ったいねえから、俺によこしな」

さっきまでの表情から一変、男達の表情に浮かんだのは憤怒。それは男達の頬を朱に染める。

「ふざけてんのか・・・?!」

リーダーと思いき・・・体格の良い青年が俺に言った。

俺は口元を三日月のように吊り上げる。

「大真面目だ」

そこで一人が何かに気づいたように声をあげた。

「リーダー、そいつ女だ」

俺は内心舌打ちをした。やはりというべきか、男達の表情が一転、ニヤニヤとした下卑たものになる。

「飛んで火にいる夏の虫」

誰かがそう言った。

「へえ？ よくそんな言葉を知ってるな」

俺はその男に素直に感嘆した。

「なっ！」

その男は怒ったように声をあげて俺に組みかかってくる。俺の服の襟元を引っつかみ、自分の目線に合うよう、俺を持ち上げた。

だって、ねえ？ 中世ヨーロッパ、こういうことをしてる奴、ってのは大概無知なイメージあるでしょ。

「声に出てるぞ・・・！」

「どこから？」

俺は激昂する男を冷やかな目で蔑むように、ってか蔑んでその男の目を見た。

男はさらに激昂する。

「てめえ！」

俺のはいてるズボンに手をかけてきた。ので、俺は迎撃する。男の髪を右手で引っつかみ、手前に引き込んだ。同時に、男の勲章を爪先で蹴り上げる。

男はその痛みに手を放した。同時に俺は崩れ落ちようとしている奴の髪を、右に引く。

男の顔は変な声をあげて、右に行く。すると、そこにお仲間の拳が入った。

俺の脚が地面につく。腰を落とし、そいつにも男の勲章の蹴り上げた。またしても変な声が聞こえた。俺は崩れ落ちようとする馬鹿二人の後頭部を、背後からわしづかみにして、一気に地面に叩き付けた。

刹那、背後から空を切る音が聞こえた。前に前転し、それを避ける。ガツツ、と地面に何かが振り下ろされるような音。同時に、

「動くな！」

リーダーと思しき奴が女の首筋にナイフを添えていた。

「お前はこの女を助けに来たんだろう？」

俺はそれに答えない。

すると男が笑って言った。

「服を脱げ」

俺は躊躇いもせず、麻布で作られた服を脱いだ。その際、あくびが漏れそうだったので歯を噛み締めた。

女は更に絶望した表情になる。何か言いたそうだが、男に口をふさがれているため、何も言えない。まあ、言ったとしても俺は何も答えないが。

男達は何故か息を呑んだ。俺はニヤリと笑みを浮かべる。

「何だお前ら、幼女趣味だったのか」

俺は男達の股を見る。やはりというかなんだが膨れていた。

男達は一瞬口元を引きつらせたが、すぐにニヤニヤとした下卑た表情に戻る。

「お前、それをいつか後悔するぜ」

一人の男が俺にそう言った。

俺は何も答えない。代わりにそいつにありありと嘲りと蔑みを浮かべた笑みをやった。その男はまたしても頬をひきつらせた。

「下もだ」

俺はズボンのベルトを緩める。ズボンはシュルツ、と布のこすれた音を立てて俺の足元に落ちた。男達の鼻息が一層しつかりと聞こえる。俺はその鼻息に嫌悪の表情が自然と浮かんた。

俺はそこで手を止める。

「どうした？ 今更になつて惜しくなつたか？」

リーダーが俺を嘲るように言った。

—— 全く持つて凄みが無い。

俺は再度湧き上がってきたあくびを噛み締めた。それを男達は悔しがっていると取ったのだらう。すると、一人が言った。

「残念だったな。その年じゃ未経験だもんなあ」

男はそう言うのと笑い出した。それにつられて周りも笑った。

—— つまらん。

リーダーはひとしきり笑った後、俺に再度言った。

「それも、脱げ」

俺は少しも躊躇わずそれを脱いだ。そして、足元に脱ぎ捨てていたものを拾い上げて、まとめて遠くへ投げ捨てた。

男は俺に縄を投げ渡した。

「それで手を縛りな」

「断る」

俺は即答した。

「なっ！？ お前、この女がどうなってもいいのか？！」

俺は驚きおののく男達を見て深々とため息をついた。

「いいね」

俺はその言葉を置き去りにして、前に地を這うように跳躍した。

傍目から見れば消えたように見えただろう。俺は男二人の手前でしゃがみこみ、両手を上に向け両方の肘を腰に当てる。

そして、男二人の顎をそれで跳ね上げた。その後、横に跳ぶ。するとさっきまで俺のいたところに何かが振り下ろされた。

「捕まえた！」

跳んだ先で、俺は一人の男背中から抱きつかれた。

「今だ！ とり・・・」

男のはなっぷしに拳を打ちつけ、肝臓を肘で強打する。その後、後ずさるそいつの首に後ろ回し蹴りを寸分違わずいれてやった。

ねっとりと、その男の血が俺の拳から滴る。

「てめえっ！」

リーダー以外の奴らが俺に掴みかかってきた。

俺は、口の端を吊り上げた。

男達の攻撃をかくぐり、カウンター気味に男達の顎に拳か爪先をめりこませる。

数人を血の海に沈めた後、一人のまだ倒れていない男の方にかかとを振り下ろす。男の肩で嫌な音がした。しかし俺は、それが耳朶を打つと燃え上がった。

男の肩を足の指でつかみ、それを支点に体を持ち上げる。そいつはそれに呆然とする。そいつの頭にもう片方の足を置き、その足でそいつの頭を蹴った。

その後背後でゴツンッ、と派手な音がした。

蹴った勢いで目指すはリーダー。そいつは俺がそこからまさか人を踏み台にここまで来るとは思っていなかったのだらう。呆然としている。

俺はそんな奴に情けをかけるほどお人よしじゃない。俺はそいつの顔を右足で蹴りぬき、そいつの後頭部を後ろの石の壁に打ちつけた。

「よつと」

俺はそこからくるりと一回転して着地し、女に言った。

「ここはもうゴメンだろ。着いて来い」

俺はクルリとその女に背を向けて歩き出した。女はしばらく何がおきているのかわからない様子でボケツとしていた。

女は俺に声をかけた。

「あつ、あの・・・」

「何だよ？」

「服・・・着なくて良いんですか？」

・・・忘れてた。

第六話 自称じゃねえ！ ふざけんなア！ バカヤロオオオ！（前書き）

・・・長さがいまいち安定しない。どうしたものかね・・・？

第六話 自称じゃねえ！ ふざけんなア！ バカヤロオオオ！

俺は気絶した奴の服で手足の血を拭き、その後で服を着た。

ちなみにあいつらはほって置く。通報もしない。面倒だし。

良心？ なにそれおいしいの？ ってハナシ。

——話がそれた。

「ついて来い」

俺はそういうと俺が着替えるまで待つていた女に背を向けて、俺の泊まっている宿があると思われる場所に歩き始めた。

「待つてください」

しかし、女に呼び止められた。

「何だよ」

俺は振り向かず尋ねる。

「すみませんが・・・この格好ってどうにかならないんですか？」

俺は女の服が切り裂かれていたことを思い出した。思わず舌打ちを漏らす。

「ちょっと待て」

俺は血のしみこんだ砂地に倒れこんでいる男達を集め、そいつらから服を剥ぎ取った。なにやら女が顔を赤らめていたが気にしない。服を剥ぎ取った後、男達を個人個人で男達のズボンを利用して縛り上げる。

俺はそこまでをしてパンパンと手を払った。

今、俺の手元にあるのは男達から脱がしたシャツのようなもの数十枚。俺はそこから一つ、女の華奢な体格に合うようなシャツと切り裂かれた女の衣服を見つけると女に投げ渡した。

幸いにも女の切り裂かれた衣服は衣服として機能しないまでには切り裂かれていなかった。

「切られた服を着てからそのシャツを着ろ」

さて、ここからが面倒な作業だ。

全ての服の先を細く長くイソギンチャクの触覚のように切り裂いて、その触覚をそれぞれ結んで簡素な袖なしのワンピースに仕立て上げる。

これで当面の問題は解決。俺はそのワンピースも女に投げ渡す。

女はそれに目を見張りながらもそれに袖を通す。

「じゃ、屋根の上に上れ」

「え．．．？」

おい、何だそのへんな人を見る目は。

「さっさと上れ。俺はこの辺りの地理に疎いんだ。よって、俺が来た道のりを戻る」

「わ、私の家の場所はここから分かるのでそっちに行きませんか？」

何言ってんだこの女は。

「お前は馬鹿か？ 状況を見るに、帰り道をあいつらに襲われたんだろが」

俺は顎で男達を指した。

「そんな信用できない帰り道をわざわざまた行くのは、襲ってくださいといっているのと同じだ」

「ですが．．．」

はあ、と俺はため息をつく。どうしてこう強情なのか。いや、人のことは言えないか。

「あの、何で笑うんですか？」

おっと。

「知るか。で、お前はどんなんだ？ さっさとしねえとこいつら起きるぞ。それとも、上れないのか？」

「当然でしょう」

女は呆れたように言った。

「お前はここの住人だから魔法を使えるだろう。それ使って上れ」

「使えません」

俺は驚いた。

しかし、そんなことで時間を費やすほど俺は馬鹿じゃない。

俺は女に歩み寄った。

「受身を取れよ」

「へ？」

俺は女を担ぎ上げ、屋根の上へと放り投げた。

——重っ！

「いきなり何するんですか？！　そして重いなんて失礼です！」

口に出てたか。

俺は女の小言を無視し、屋根に飛び乗る。

「よっつ」

「それに、君は女の子だからもう少しお淑やかにできないんですか！」

「うっさい。そのがさつな奴だから助けられたんだ」

おらさつさと行くぞ、と俺は女に言って小屋やら家やらの屋根を歩き、宿に着いた。

その間、女がなんか言ってたが俺は一切それを無視した。

俺は開けた窓からスルリ、と部屋に入る。

「待ってください！」

「今度は何だよ」

俺は疲れたオーラ全開で窓から顔を出し、女に言った。

「どうやって降りるんですか！」

降りられないんだな。

俺は深々とため息をついて、再度、屋根の上に乗上った。そこで俺は女をお姫様抱っこをする。女は何かわめいたが、無視。

俺はそのまま宿の入り口前に飛び降りた。

その際足が痺れたが、まあ、大丈夫だろう。俺は女を地面に下ろす。

女は青い顔をしていた。

「どうした？」

返答の予想はついているがあえて尋ねる。

「殺す気ですか!？」

「降ろす気」

ほらやっぱり。

「来い」

俺は俺の行動に未だに驚いて固まっている通行人を無視して、女の腕を引っ張って宿に入り、大隊長のいる部屋へ向かった。

大体長達のいる部屋のドアをノックして、返事を聞かずドアを蹴り開け、中に入る。

「どこだ大隊長」

「・・・眼の前だ」

「おっと、スマンな」

大隊長は呆れたように俺を見ていた。

俺はそれをスルーして、女を部屋に入れる。

「おら、大隊長。強姦被害者だ」

「ちよっ！？」

女が何故か俺を非難するような目で見る。何だ？ 俺は何かしたのか？

そして大隊長を見れば、額に手を置き、口をあんぐりと開けている。

「・・・」

そして絶句。なにやら呆れと驚きをそれぞれ半々で表したような人間離れしたすごい表情だ。

「おい大隊長」

大隊長の眼が見開かれた次の瞬間。

「リディア王女様！？」

——・・・何ですと？！

俺は驚き、隣にいる女を見た。

腰までとどく長い金髪に、サファイアのように深い青色の瞳のあ
るパッチリとした丸い眼、スツと通ったきれいな鼻筋、処女雪のよ
うに真っ白な肌とは対照的な赤く細い唇。身長は150？ほどで細
身で華奢だが、出るところはしっかり出て、その逆もまた然りだ。

歳は・・・16・7歳ぐらいだろう。

「こんなのが王女？」

俺は知らずの内にこう、口にしていた。

「なっ！？　おい、ホオズキ！　今すぐ王女様に謝れ！」

俺はため息をついた。

「スマンな、王女さん。——大隊長、この一日でだが俺の性格はある程度分かってるだろう？　もうすでに俺の地で接してんだ。さつきまで地で接しとった奴に敬語なんかつかわねえぞ」

「君はなんでこんなのって言ったの・・・?!」

女、改め王女の引きつった顔を見上げる。

「威厳の欠片もねえから」

即答した次の瞬間、側頭部を大隊長に小突かれた。

「っ痛えな！　何すんだ！　大隊長！」

「黙れ！」

大隊長はそう言つと、俺の首元を猫のように引つつかむ。

「あっ、てめっ！」

「うるさい！ レイ！」

「はい」

「この小娘を見張つとれ」

「はい」

「大隊長！ 俺は女じゃねえ！」

「はいはい、失礼しますよ。自称少年小娘さん」

レイの野郎は冷ややかに俺にそう言った。

「自称じゃねえ！ ふざけんなア！ バカヤロオオ！」

自分でもわかるぐらいに、この叫びがただの無駄なものに
てきたと感じる。

——・・・泣いていいかな？

大隊長ことアベル・タッカーは副隊長であるレイに優介を渡すと、

ホウ、と疲れきったため息をついた。

リディアはこの騒動にただただ呆然としている。

アベルはリディアに言った。

「王女様、こちらへ」

リディアはアベルに連れられ、安い宿の一室に入った。そして促されるまま、部屋に置いてあるソファに腰掛けた。

「おい、誰か手の空いている者はいるか？」

「はい、ここに」

「今すぐ王宮へリディア王女様がここにいることを伝え、大至急、迎えを呼ぶように頼んでくれ」

「はっ」

アベルに言伝を頼まれた兵士はすぐに支度を整え、部屋を飛び出していった。

「一時間もすればお迎えの馬車が来ます。むさくるしい男だけの部屋ですが、それまでここでお待ちください」

アベルは座ったリディアににこやかに笑った。するとリディアは何か思い出したように話し始めた。

「すっ、すいませんタツカー大・・・」

「王女様、自分は大隊長でございます」

リディアは一つ自分を落ち着かせるために咳払いをした。

「・・・失礼しましたタツカー大隊長。先程は我を忘れ貴方に挨拶できず、その上みつともない姿を見せてしまいすみませんでした。重ねて非礼をお詫びします」

「いえいえ、滅相もございません。こちらはこちらで、我々が預かっている子供が王女様に失礼な物言いをしてしまい、真にすみませんでした。後で、あれにはきつく叱っておきます」

リディアは慌ててそれを否定した。

「いえ、あの子には私の窮地を救っていただきました。感謝こそすれ、怒ってなどおりません」

それと、トリディアは続けた。

「あの少女は何ですか？」

アベルはこの質問に眼を手で覆った。

「あの少女は私を・・・その・・・襲おうとしていた男達をいとも簡単に倒しました。その上、自分のことを男だと主張していますか・・・」

尋ねているはずのリディアもこれには困ったような表情をした。

はあ、とアベルはため息をついた。

「お恥ずかしいことですが、このアベル、油断していたとはいえあの少女は我らをのしたほどの強者であります。実力はまず騎士の一小隊は簡単にのすでしょうな。・・・そこまでは良いのですが・・・」

「・・・あの傲岸不遜といいますが、大胆不敵といいますが・・・」
アベルとリディアは同じようにため息をついた。

「・・・まあ、もしかしたら彼女は本当は男だったのかもしれないがね」

アベルが自然とこぼした呟きにリディアは何か引つかかるものを感じた。

「・・・男、だった・・・？」

「ああ、王女様にはまだ話していませんでしたね」

リディアは下げていた顔を上げ、アベルの眼を見た。

「彼女・・・、いえ、あれはシューの王女が異世界から召喚した者
いわば、シューの召喚勇者です」

リディアは自分の耳を疑った。

第六話 自称じゃねえ！ ふざけんなア！ バカヤロオオオ！（後書き）

・・・あれ??? 主人公と王女、早速不和に?! 始めは仲良くさせようと思っていたのに・・・。勢いで書いていたら、いつの間にかこんなになっちまったZE

・・・ゴホン。感想・・・、よければよろしくお願いします。

面白かった、読みやすかった、いやいや面白くもなんとも無かった、つまらなかった、こうしたらいいんじゃないか? などなど、辛口甘口の批評やらなんやら、お待ちしております。

第七話 新しいプレイ？

「あんなのが勇者？」

「王女様、口調を正してください」

「・・・コホン。あのように幼い者が勇者ですか？」

「おさな・・・、失礼しました。全くもってその通りです。私はあれと話しているとどうしても私とあまり歳が離れていないように感じるもので・・・。まだまだ言動から幼さがとれていませんが」

アベルは困ったように、しかしどこか嬉しそうに笑った。

実際、優介の考え方はあまりにも年相応のものとは言えない。少し割り切りすぎている。

アベルは物分りが良く話の上手い優介と、ついつい長々と国や人間の思想についての話をしているとき、優介はこう言った。

「善や悪なんて所詮、自分達で考えたもので人間のエゴ。それが正しいだとか正しくないだとか、くだらない。善は自分が人にして欲しい事、悪はして欲しくないこと」

なるほど、とこれにアベルは感心した。

悪いことは誰からもして欲しくないこと。盗みや殺人等がそうだ。これを善といえるだろうか？ 無論、誰もが悪だという。

しかし、物事に例外はつき物で悪には悪と言いくらいものがある。

例えば、一つの貧しい夫婦がいるでしょう。そこでは一人の子供がいて、その子供は病にかかった。夫婦にはその病を治す薬を買うためのお金は全く無かった。

そこで、お金が必要な夫婦は盗みという悪を犯し、それで盗んだものを換金しそのお金で薬を買った。

しかし、これを悪だとはつきりと言えることができるだろうか？

答えは否。人を助ける、それは誰だつてして欲しいことだ。

しかし、これを善だとも言えるだろうか？

これも答えは否。

盗みなど、誰もして欲しくなんかない。

「だから俺は自分で決める。善や悪の判断なんて人それぞれだ。人に流されるのは俺は嫌いだ。だから俺は自分で決める。どっちが俺にとっての善で、俺にとっての悪なのか。俺の、敵か味方か」

ちなみに優介が言うには、あの夫婦のしたことは、悪の善というものらしい。悪の中の善の行動。

そのやりとりをきいて、リディアはため息をついた。

「どこの大人のやり取りですか・・・」

「理解できないからと嘆きにはならないください。齡40年の私
でさえ、時々あれの言うことには舌を巻かれますから」

そんな時、話題の人物の怒鳴り声が響いた。

「レイ！ 俺は一人でも十分に風呂に入れるから小間使いなんて呼
ぶなアツ！」

「いえいえ、一人で十分に洗えたとしても、完全に洗うことは不可
能です。明日は国王陛下と謁見ですよ。汚い格好をされては、貴方
がよくありません」

「うるせえ！ 俺にとつてはどうでも良いんだよ！ 国王だかなん
だか知んねえが、仮にも一国の王ならそれくらい目を瞑れるだろう
が！ それに、俺はこの格好はきたねえと思うが、完璧に洗う必要
性は全く感じねえ！」

「我々が国王に会うには可能な限り、綺麗にする必要があるのです。
貴方のもとの世界がどうだろうが、貴方が必要に感じないだろうが、
郷に入りては郷に従え、貴方はここの国の住人です。なので、我々
の文化やしきたりは守ってもらいます」

「~~~~~っ！ おいつ大隊長、お前が小間使いの代わりを
しろ！」

アベルは一瞬大隊長とは誰のことかわからなかったが、理解する
とすぐ怒鳴り散らした。

「ホオズキ！ お前は娘だろうが！ 娘が異性にそう簡単に肌を見
せるようなことは言っな！」

「お前の歳なら子供がいるだろう！ その子供の体を洗うって考えれば良いだろうが！」

「~~~~っ！ 私はまだ独り身だ！ 子供なんぞおらんわ！」

一瞬、静寂が宿を支配した。優介はまさかアベルがまだ結婚していないとは思ってもいなかったようだ。

「嘘だろうっ！？」

「本当だ！」

「チツ！ だとしても、俺はこんな姿でも、元は男で色々多感な17歳だ！ つーわけで俺は一人で洗うか、もし、誰かが俺を洗うのなら、俺は男にそれを要求する！」

「ふざけるな！」

「大真面目じゃア！ バカヤロオオオ！」

そんな優介のやり取りを最初から聞いていたレイはため息をついた。

「仕方ありません。失礼しますが王女様、このホオズキちゃんはどこかに逃げないように見張っておいてくれませんか？」

「ちゃん付けで呼ぶなア！ 俺は男だア！」

「え？ ええ、良いですよ・・・」

「では、少し外に出てきます」

レイはそれまで優介といった部屋から出てきて、このうるさい空間から逃げた。

それから何分か経った後、レイは一人の女性を連れてきていた。その女性はいまだに口喧嘩をしている二人を見ると眉をひそめた。

「ねえ、レイ。これは何？」

「気にしないでください。取りあえず、少女に動けないよう魔法をかけてください」

その女性は頭に手を当てた。

「わかったわ。『束縛』」

「なあっ！？」

優介は急に大の字になって動けなくなり、地面に倒れた。

「こなっ、くそ！」

レイはなんとか動こうとじたばたしている優介を抱え上げ、風呂場のほうに連れて行った。

「てめえ！ 魔法なんて卑怯だぞ！」

「アン、僕に失明の魔法と、難聴の魔法をかけてくれませんか？」

そしてこの部屋から・・・音が漏れないようにしてください」

「わかったわ。・・・でも、何するつもり？」

「この子を動けないようにします。魔法無しで」

アンが頬をひきつらせた。

「まさか・・・貴方ってそっちの気があったの？」

「ありません、だから眼と耳が使えないようにするために貴方に頼んでいるんじゃないですか」

「新しいプレイ？」

「だから違いますって。この子の体を小間使い達に洗わせる為です」

「冗談よ、わかったわ。——で、報酬はいつくれるの？」

「たぶん、今日の夜は何も無いと思いますから。その時にでもたっぷりと」

アンと呼ばれた女性は僅かに頬を染めた。

「じゃ、今夜を楽しみにしておくわ」

「あつと、まだ仕事は終わってませんよ。もうしばらくここにいて下さい」

アンとレイはわめき続ける優介をよそに風呂場に入った。

「俺を無視するな！ さつさとこの魔法の拘束を解け！」

「アン、お願いします」

「はい」

アンはにっこりとレイとこの部屋に魔法をかけた。

「あつ！？ レイ何するてめえ！ やめろ！ 変なとこ触んなー
————！！！！！！」

悲しいことに優介の必死の叫びはアンにしか届かなかった。

その上、そのアンは恨めし・・・もとい、羨ましそうにそんな少女を見ていた。

・・・っと、記載し忘れていたのでここでレイとアンの紹介をしよう。

まずはレイ、フルネームはレイ・アズモンド、25歳。水色の髪に水色の瞳、ルックス、容姿とともに整っている一応美をつけても良い少し女性のように見える青年。常にどこか気だるそうにしており、他人の言動にあまり頓着しない。

次にアン・ベイル、23歳。栗色の少し長めの巻き毛に黒色の瞳、こちらもレイと並んで歩いてもなんら見劣りしない女性。少々歯に衣着せぬ言動が多く、場合によっては嫌味な女と思われる節がある。無論、本人はそうしている自覚は無い。

第八話・・・なぜ、こんなことになっている。（前書き）

ウェイのつもりがキルアになっていました。訂正する前の文を読んだ人、すいません。

あと、少し違和感を感じる文を少しいじり、改善したつもりです。それでも違和感があるという場合は教えてください。可能な限り、改善します。

第八話・・・なぜ、こんなことになっている。

・・・なぜ、こんなことになっている。

俺が目を覚ましたとき誰も俺の顔をちゃんと見て話そうとしなかった。その上、レイ以外が全員俺を避けているのだ。

俺は一体何をしたのだろうか？

大隊長に尋ねてみると、

「・・・ああ、アンか」

と、どこか疲れきったような表情をして、そう呟いた。アンとは昨日レイが連れて来た魔法使い・・・、だったと思う。

そういえば昨日、アンに魔法をかけられて動けなくなった後、レイが俺を浴室に連れてつてたが、何をされたのだろうか？ 昨日、あれからの記憶が全く無い。

・・・もしかしてこれまでと違う体で昨日は連戦したから、風呂に入ったときに気が抜けて寝てしまったのだろうか？・・・たしかに疲れたから寝たのだろう。そんな気がする。

さて、昨日のことはもう振り返らないでおこう。

今、俺は城の中にいる。ここの最上階に玉座がある。俺はそこへと、大隊長とレイに連れられそこへ向かっている。

大隊長とレイは心なしに緊張しているように見える。大隊長が緊張するのは真面目一辺倒だからそんな感じはしていたからなんら不思議ではないが、レイが緊張しているとは思ってもいなかった。

レイは俺から見てかなり飄々としている、かなりお得な性格をしている。そんなレイが緊張するほどの国王。気を引き締めて相手にのまれないようにしなければ、良いようにこき使われるかもしれない。

話は変わるが、俺はこの城を見てから入ってからは驚きのしつぱなしである。

城は青と白を基調とした、日本の代表的なRPGゲームそっくりの城だった。尊大で雄大で豪華絢爛、この三つの言葉でしか表せないだろう。

城に入るともつと驚いた。天井は高くアーチ状で、そこにはいろいろな絵が描かれている。素人の俺でさえその絵はすばらしい物だと感じるほどのだ。

城内はひっきりなしに兵士と小間使いが行き交いし、たまにだが子供が親と思しき大人に連れられるのも見た。理由はわからないがその子供ははしゃいでいた。

俺は城内を見て、ここの国王は平民階級の人達からも慕われているだろうと思った。地図を見せてもらったがウェイは本当に大きな国だった。

そんな国の王が人口の大多数を占める平民に慕われていなければこんなにも発展はしないだろう。こんなにも和やかな空気は流れな

いだろう。

人を纏めるという事はとても大変なことだ。それがこんなにも大きなグループであればなおさらだ。

とりあえず、国王は侮れない。大隊長の話からすると、多少の無礼は許してくれそうだ。しかし、周りは許さないだろう。

対応の仕方は周りの力量しだいでどこか。

「ホオズキ、そろそろ着くぞ。玉座に入る前の部屋には大きな鏡がある。そこで身だしなみの確認をしろ」

「へいへい」

「それと国王様には無礼な態度をしないように。一日程度ですが貴方が敬語が苦手だということがわかったので、一応国王様と周りの側近にそれを伝えておきました。なので多少言動が乱雑でも良いですが、無礼な態度は決してとらないでください」

「わかってますよ。レイ副隊長」

俺は女らしい口調と態度をとった。

「・・・そんな感じでお願いしますよ」

どうやらこんな感じで良いようだ。

そうこう注意点を二人から聞き、確認しているとその部屋に着いた。その一つの壁一面に鏡があった。なるほど、これで身だしな

みをしると。

俺達三人は鏡の前に立ち、それぞれ服装を確認する。

俺は薄いピンクと白を基調としたワンピースのようなドレスを着ていた。これを着る時、かなりごねた。しかし、これ以外の服装では会わずことはできないとその場にいた全員に言われ、嫌々着てやった。

同じ人間なのになんでこんなことをしなくてはならないのだ。

コンコン、と扉からノックの音が聞こえた。

「なんでしょうか？」

「準備ができましたので玉座のほうに来てください」

「了解しました」

レイがよく通る声でその対応をした。

さて、この国のトップ集団はどんなのかな？

シユーの王女の召喚した勇者が今からここに来る。

僕はそれを楽しみにしていた。

シユーの王女とその王女が召喚した勇者が来ると聞いたのは真夜中だった。僕は驚いた。なんせ、勇者を召喚することはそんな簡単なことではないからだ。

異世界から世界に平穏をもたらす者を召喚する。その召喚されたものが勇者だ。その勇者には他とは一線を越えた力がある。

勇者はその力を持って世界に平穏をもたらすらしい。僕は信じていないけどね。

ま、それはさておき、僕がなぜキルアの勇者を楽しみに待っているかというと、僕はその勇者と話がしたいからだ。

僕もこれから現れる人と同じ勇者だ。僕も異世界からここに召喚された。

この世界の常識と僕のいた世界の常識はかみ合っていない。それが辛かった。全く知らない場所で生活することは想像以上に辛い。

それを癒そうにも、僕と話の合う人はいなかった。当たり前だった。僕のいた世界とこの世界の価値観が違う。

たしかに、違う価値観を持つ人と話すことはとても楽しい。

しかし、あまりにも違い、ホームシックになったとしても元の世

界の話ができないことはただ辛いことだ。

だから僕はその人と話がしたい。たとえその人と僕の世界が違ったとしても、境遇の似るものが一人でもいることはそれはとても安心する。

ドアをノックする音が聞こえ、そのドアが開いた。

「失礼します」

入ってきたのは三人。アベル大隊長とその副官のレイ副隊長、そして、薄いピンク色のドレスを着た、可愛い13歳くらいの小柄な少女だった。

ところどころ癬毛のある短く切られた黒い髪に上目遣いの黒い眼。・・・上目遣いじゃなくて三白眼か。少し大人びたところのある幼い顔。

・・・話は合うかな？　ちなみに僕の年齢は18歳。高校ライフを満喫していたときにここに召喚された。

「大隊長アベル・タッカー、及び、自分の副官レイ・アズモンド、シューの召喚勇者ホオズキ・ユウスケ、ただいま参上いたしました」

・・・ユウスケ・ホオズキの間違いだね？　そして何であの子は男の名前なの？！

畜生め……。傲岸不遜な態度をとりてえが、俺より強い奴がここにはわんさか居やがる。

特に18歳ぐらいの端正な顔立ちをしている黒髪黒目の、日本人の美青年。一見ほんわかとした緩い空気を出しているが、全く隙はない。

おそらくこいつがウェイの召喚勇者か。強さもそうだが、なににより周りと空気が違う。周りより平和ボケした空気に、紺のジーンズに白い長袖のシャツと黒い長袖のベスト。服装が今時の若者そのものだ。

本人は意識しているのかしていないのか、常に腰にさしている黒塗りの刀に手をかけてやがる。俺が今ここから飛び出したとしても、俺に瞬時にその刀が振りぬかれることは容易に、リアルに想像できた。

「大隊長アベル・タッカー、及び、自分の副官レイ・アズモンド、シューの召喚勇者ホオズキ・ユウスケ、ただいま参上いたしました」

ん？ 何かアイツ俺を見てハテナマークを頭に浮かべてい……。
ああ、俺の名前か……。

ここに来る前、レイと大隊長から女の名前にしないかといわれた

が、俺はそれを丁重に断った。そうじゃねえと、俺が本格的にここで女として生活してしまうかもしれないからだ。

一応、この世界にはせつかく魔法つつー、結構応用の利きそうな技術があるんだから。魔法はしっかりと勉強して何とか男に性転換できる魔法を創らねえと。

・・・っと。自分の考えに浸ってる場合じゃねえか。

さて、この膝をついて頭を下げている体勢どうにかならないかね。そろそろ限界だ。

「面を上げよ」

少し高めの声が上のほうから聞こえた。

俺は頭を上げ、国王を見た。

白く長い髪、少し青色の混ざった灰色の瞳、白い肌、あの美青年に負けず劣らずの端正な顔立ち。25歳くらいで体格はなで肩で痩せ型。そっぴやここの国王は女性のファンが多いと聞いたな。納得した。

国王は大隊長、レイ、最後に俺へと視線を動かした。

フツ、と雪のような儚い笑みをした。天然かどうかはさておき、こいつは結構な女誑しだな。

「よくぞこの重大な任務をこなしてくれた。礼を言うぞ、アベル・タッカーとレイ・アズモンド」

俺は大隊長とレイを視界におさめる。大隊長は体全体で喜びを表し、レイは普段は見せないような少し恍惚とした表情をわずかにした。

「お褒めに預かり光栄です」

大隊長は喜びで声が出ないらしい。代わりにレイがそれにわずかに喜色を称えて応対する。

「で、君がシューの召喚勇者か？」

「はい」

俺は国王の眼をまっすぐに見つめ返す。

こいつは手強いな。天然、天性のカリスマ。腹黒でないことは確かだが、こいつは人を不快に思わせず動かせる奴か。こいつ自身は怖くないが周りが怖い。

人を疑うことを知らないような純粋な目。

精神面は脆いだろう。親しき者がこいつを裏切るだけでこいつは死にそうだ。

「ホオズキ、君の事はここに来る前に聞いた。アベルが言うには、何でも騎士の一小隊は簡単に倒すほどの実力の持ち主だそうだな」

騎士の一小隊？

「それはどのような実力を持つものが何人集まったものでしょうか？ 私はこの世界にきて少ししか経っておりませんので、その騎士の一小隊がどれほどの戦力なのか教えていただけないでしょうか？」

「うーん、言いにくいな」

「アベル大隊長が本気を出してやっと倒せる戦力です」

どう言おうか国王が悩んでいると一人の男が代わりに答えた。

俺はそいつに目をやった。

そこにいたのは糸目の刈り上げた金髪の男だった。30代前半、白銀の鎧甲冑を身に纏いいかにも騎士、という感じの男だ。

「ありがとう、キース」

「褒められるほどのものではありません」

ふうん。

キースと呼ばれた男はつまらなそうに俺を見た。

そこであの美青年がおずおずと手を挙げた。

「なんだ？ リュウト」

「あーと、国王陛下。その子の下の名前はユウスケだと思いますよ？ 合ってる？ ユウスケ」

こいつは日本人確定、と。

「そうですよ」

「そうか。すまない、ユウスケ」

国王は申し訳なさそうに俺に謝った。てか下の名前で呼ぶのは止めて欲しいんだけど。

まあ良いか。

さて。

「失礼ながら国王陛下、貴方のお名前はなんでしょうか」

周りがざわついた。

それを不思議そうに見ている俺を、なぜか焦っている大隊長が俺を小突いた。

「何を言ってるんだ。ホオズキ」

小声で俺にそう言った。

「名前で呼ばれるから名前で呼ばうと思って訊いたんだよ」

「はあ・・・、アホ」

「何だと！？ レイ！」

小声で怒鳴った。

と、いくらか二人と言いついていたら国王が手をあげて、場を静めた。

「スターク・ヘクセン・エディト・ウェイ、だ。ユウスケ、公の場ではなければリュウトと同じようにエディトと呼んでくれ。呼びにくいならエディ、とでも構わん」

またしても、周りがざわついた。

「ありがとうございます、国王陛下」

おいおい、と俺は思った。

こんな場所でこういうことをサラツと言うなよな、ホント。絶対にこの話は明日の朝には全員が知ることになるだろう。大国のトップが自国の勇者でもない奴にこのようなことを言ったのだ。

見ればリュウトやらが俺を気の毒そうに、同じ苦勞を背負うことになるかもしれない、自分より年下の同族を、苦笑しながら見ていた。

俺は密かに胸の中で、あまり目立たないようにしようと決意した。

第九話 いやいや、慌てなくていいって

「これにて謁見を終了します」

やっと終わったあ。

長ったらしく堅苦しい、謁見という名の世間話、もとい、拷問。大隊長とレイは、エディを見ることができ話ができたのがよっぽど嬉しかったのか、ずっと感動に浸りっぱなしだった。

俺は態度を変えずに心の中でこれからすることへと思いをはせ・
・ようとした。

「リディア、リュウト、ユウスケ、君達三人には少し話がある。リディア、この後、彼ら二人を私の私室に連れてきてくれ」

くそつたれめ。

父様はなぜ私と勇者二人を呼んだのでしょうか？ 私を案内人まですせて。そのようなもの他の召使に任せればよかったのに。

謁見という名の拷問の終わった後、思わずため息を漏らしてしまいました。

アベル大將ぐ・・・ではなく、アベル大隊長一行が扉から出るのを見届け、他の大臣達が席を離れたのを確認し私も席を立ちます。そして、リュウト様の前へと行きました。

・・・今回、も、ですか。私は再度、ため息をつきます。

原因はリュウト様です。彼は恐ろしいことに寝ていました。

右手を刀という名の東洋の剣の柄に置き、その上に左の肘を乗せて頬杖をつき、絶妙なバランスを保ちながら眠られていました。少し薄目を開けながら、眠られているのを謁見中誰にも悟られないまま。

私は彼の隣の席に腰を下ろしました。

なんでこんなに胆力があるのでしょうか。

あのときもそうでした。突然こちらへ召喚されたにも関わらず、大抵の人ならば取り乱したりするはずが、彼は平然と、

「よつ、ここどこ？」

と手を上げて、彼の世界流の挨拶をしながら、平然としておられました。世間話でもするように。

私もそのとき、その場に居たのですが、呆然と少々呆気にとられてまして、そのときのことはよく覚えていません。ただ、その後召使の噂話を聞いたところ、その場に居合わせた女性の何人かが彼の虜になったとか。

顔は整っておられますので当たり前といえば当たり前なのですが・
・、一体彼女達に何をしたのでしょうか？

しかし・・・、

「いつになったら目を覚ますのでしょうか？」

疑問が自然と口をついて出てきました。

彼が寝たのはおそらく父様がレイ副隊長の報告を受けていたとき。
三時間もした謁見の中ごろ、最低でも1時間30分は寝ておられます。
す。

そろそろ起きてもいいはずなんですけどね・・・。

私は三度目になるため息を漏らします。

ふと、私は刀に興味を持ちました。

いつも彼が肌身離さず持ち歩いている、愛用の刀身まで漆黒の刀。

彼が初めての任務から持っている刀。

彼の二つ名、『漆黒の閃光』の由来となる刀。

私はそれにそつと手を伸ばし、柄を握り、引き抜こうとしました。
が、

ガタンッ、という音と共に、私は仰向けで床に転がりその上に何かが被さりました。

「キャッ!? ——ッ?!」

悲鳴をあげようとすると、口を誰かにふさがれ、喉元に何か冷たいものが当たります。

私は一先ず落ち着き、首は動かさず視線だけを動かし、まず、喉元にあるものへと眼を向けます。

それは鈍く光を反射する漆黒の刀身。

それで私は現状を把握しました。

私に覆いかぶさったのはリュウト様。おそらく寝ぼけていらっしやるのでしよう。

「リュウト様、起きてくださ……」

ギィィ、と、私は扉が開く音が聞こえたのでそれに眼を向けるとそこにいたのはシューの召喚勇者でした。

「……あ……っとお……スマン……俺は適当な奴に案内してもらうから。ごゆっくり」

「ホオズキさん!? 誤解ですよ!? リュウト様が寝ぼけていらっしやるので……、ていうか刀が首筋に当てられている時点でそうではないと判断してください!」

「いやいや、慌てなくていいって。誰にも言わないから安心しろ。あ、あと、式のことはいっちゃん最初に教えるよ?」

「違います!! とりあえず、この人をどけてください!」

「わあった、わあった。冗談だよ。気づいてるわ、んなもん」

そう言いながら、シューの召喚勇者はこちらへと向かってきて、思いつきり足を振りかぶりました。

え?

俺は思いつきり足を振りかぶり、そして、その足をリュウトの顔面に思いつきり振るった。

するとリュウトは刀の刃をいまだリディアの首筋につきたてたまま、刀の柄で俺の蹴りを防ぐ。

寝ぼけながら蹴りを防ぐのかよ、こいつは。

足を引き戻し、トンッ、と、リュウトの肩を軽く叩く。

「今ので起きたろ。さっさとそいつからのけ」

返答は、刃だった。漆黒の閃光が、俺を横一文字に切り裂いた。

それを見てリディアは、小さく悲鳴をあげた。

俺はリュウトから離れて斬られた場所を触った。・・・怪我は無し、と。ドレスは斬られたが。損害賠償は・・・無いかな？

——おもしれえ、やってやるよ。

リュウトは立ち上がり、俺へと突進しながら閃光を左腰の辺りから煌かせる。それはまさに神速の神業。

居合い斬り、だな。死に体の時間が極端に少ないことを見ると、ここに来る前からかなりやりこんでたか、もしくはここに早く召喚され、そこで死に物狂いで習得したか。

まあ、どちらにしろ、厄介なことに変わりはない。

しかし、速いな。眼ではまったく見えない。見えるのは刀の通った軌跡のみ。だが、寝ているからか攻撃は直線的で避けられる。

リュウトは連続で、刀を持つ手が見えなくなるほどの速さで閃光を煌かせた。俺はそれをただの勘で避ける。

しばらくすると、更にスピードが上がった。俺はそれを更に速く避ける。

ヒュヒュヒュ、と、閃光が煌き、風を切り裂く。

だんだんとスピードが上がってきやがる。そろそろ本気を出さないとまずいか、これは。

ダンッ、と俺は後ろに跳躍し奴と大きく距離をとった。奴はもちろん俺を追撃する。

——観ろ。

先程よりも速い閃光が俺を襲う。

——見ろ。

先程よりも鋭い居合いが俺を襲う。

——視ろ。

先程よりも遅い刀が俺を襲う。

——！

爛、とドレスを一字に切り裂かれた少女の瞳が剣呑な光を放った。同時に、口の端は獣のように愉悦でつり上がる。

見た目は小柄で可憐な少女だ。だが、そんな少女が放つ気は少女のそれではなく、限りなく戦士に近い——違う、これは猛獣に近いものだ。

それまでその少女を攻撃していた閃光がピタリと止まった。

なぜ？ 少女が恐ろしいからだ。

僕はそこで意識を取り戻した。

・・・さて、現在の状況をまとめよう。

・目の前に戦闘態勢のユウスケ。

・背後には何故か仰向けに倒れているリディア王女。

「・・・何が起きてるの？」

僕はその場にいる人達に訊いた。

するとユウスケは苦虫でも噛み潰したような表情になって、口を動かした。

「ユウスケ、何か言った？」

「いんや、何も。言っていたとしてもお前が気にすることじゃねえよ」

「それは嘘だろ」

いかにも不機嫌な表情をしているんだ。絶対何か言っただろ。

「んなことより、リディアに謝れよ。お前、寝ぼけてそいつの首にユウスケはそこで言葉をいったん区切り、僕の持っている刀を指差した。」

「それを当ててたんだからな」

——・・・はい？

「ごめん、もう一度」

「首に刀を当ててたんだよ、お前が」

「・・・僕が・・・、誰に？」

ユウスケは眉をひそめた。

「そのリディアに」

「王女に？」

「ああ」

え〜と、俺が寝ぼけてリディアに刀を当てたと……。首に。

……。首に。

……。首、に？ 王族、の？

「……。おい、顔が真っ青だぞ」

僕は女の子に似つかわしくない口調を最後に聞いた。

第十話 とてつもなく最悪な答えだった

俺はリュウトとの一戦の後、不本意ながら・・・ホントーに不本意ながら新しいドレスを着て、倒れたリュウトを背負い、リディアに連れられエディの私室へと向かっている。

その間、リディアとは一切喋っていない。まあ、どうだって良いが。

それよりも俺は非常にイライラしている。理由は俺の背中で寝息を立てているこいつと最後まで喧嘩できなかったことだ。俺はあの時、自分の最高の状態を作り出せていた。

しかしそれはリュウトが正気に戻ったせいで、無理矢理あの状態を引っ込めなくてはなくなってしまった。そのため、不完全燃烧だ。最高に燃え上がった瞬間に鎮火させたため、フラストレーションが限界に近い。

——そう、本当に限界が近い。

なんなら今すぐにここで暴れだしたいくらいだ。暴れれば警備の兵が来る。国王のいるこんな大きな宮殿の警護を任されているんだ。弱いはずがない。

・・・っと、そろそろこれ考えるのはやめよう。本当に押さえが利かなくなってしまう。

「着きましたよ」

リディアは赤地に金色で何かが描かれている立派な扉を数回叩き、その扉を開けた。

「父上、失礼します」

「ああ。よく来てくれた」

エディは赤い豪華な椅子に深々と身を沈めていた。リディアは一礼し、部屋へと入る。

部屋はなんというか、・・・豪華で立派だとしかいえなかった。

よく磨かれた鏡のような白い大理石の壁、足元には毛足の長い真紅の絨毯がしかれ、天井にはガラスで作られた大きなシャンデリアが吊るされている。

どうやらこの部屋は寝室も兼ねているようで、隅のほうに・・・天蓋つきの真紅のベッド。流石に机までは真紅に塗られていなかったようで、壁を除き、唯一真紅の色ではないものが机だった。

ま、そんなこんなで高級感がこれでもかと溢れる真紅が一面に広がっているわけだ。

「・・・なぜ真紅一色・・・？」

「陛下は少しお体が弱いのです。赤い色には病魔を遠ざける効果があるそうで、そのおかげか、ここ最近陛下は病気にかかっておりません」

「ふうん・・・。ってかお前は誰？」

俺の呟きにわざわざ答えてくれたのは、黒い燕尾服を完全に着こなしている痩せ型の初老の男性だった。おそらく執事だろう。

「私はクリストファー・レインウッドで御座います。ご覧の通り、陛下の執事をやらせていただいています」

そう言っぺこりと頭を下げる執事。・・・やはりというか、その動きは洗練されているもので、目を惹くものがある。

「俺の名前は鬼灯優介、こちら風で言うとユウスケ・ホオズキ、だ」
執事は一瞬驚いたように眼を見開く。

「これはこれはご丁寧ありがとうございます。シューの召喚勇者様」

なぜこちらが普通に対応するだけで驚くかねえ。

俺は勇者という言葉に眉をひそめた。

「勇者は止めてくれ。俺はそんなのになつた覚えは無いんだよ」

俺は、だいたい、と言って言葉を続ける。

「俺は勇者なんて柄じゃねえんだよ。どっちかつつと、そこら辺の町にいるゴロツキだ。そんな奴が勇者だなんて滑稽にも程がある」

俺はここで言葉をきって、クツクツ、と笑った。

「ゴロツキが勇者だなんて、身分を重視する奴らにはたまらないだろう?」

俺は執事から目を離し、エディに言った。

「エディ、俺を呼んだ用事は何だ?」

同時に背負っているリュウトを真紅のベッドに放り投げる。リディアはそんな光景に面白い間抜け面をさらし、エディはきよんとしている。

リュウトがベッドに落ちると、ベッドはきしんだ音を立て、リュウトから変な声が聞こえた。

「ぐえっ」

という蛙の潰れるような声だ。いやはや、愉快愉快。

「エディ?」

「あ、ああ。・・・まず最初に、シューの王女から君にこれを渡すように頼まれた」

そう言っただけエディは机の引き出しから取り出したものを俺に投げ渡した。

「何だこれ?」

エディが投げ渡したのは二つのブレスレットと一つのチェーンだった。

「魔法具だ。リュウトが持っている刀と同じようなものだ。用途は不明だがな」

「ふーん」

ブレスレットとチェーンは光沢があることから、何らかの金属で出来ているのだろう。ただ、それぞれの色が違った。

チェーンは灰色だった。灰色といえなくすんだイメージが強いが、これはどういうわけかとてもくすんでいるようには見えなかった。あと、首飾りのようだ。

ブレスレットはそれぞれ、『L』『R』と彫られており、『L』が白で、『R』が黒だった。

「・・・なあ、このLとかRとかは何なんだ？」

「さあ、私にはわからないな」

「私もです」

「拝借してもよろしいでしょうか？」

執事がそう言って俺の前に来た。

「ああ」

俺は執事にそれを渡す。執事はそれら二つを見比べた。

「うゝむ・・・」

悩む執事。そこでリュウトが腰をさすりながらこっちへ寄ってきた。

「・・・ユウスケ、あれはないと思うよ」

「気にすんな」

リュウトがなにか言ってきたが適当に流す。

「・・・なあ、執事さんは何をしてるんだ？」

「ああ、ブレスレットにLとかRとか彫られているんだけど、俺にはさっぱりでな。執事さんに見てもらってる」

「・・・それって左右のことなんじゃないか？ レフトとライト」

ああ、なるほど。

俺は執事さんにブレスレットを返してもらい、リュウトの言うとおり、白いほうを左、黒いほうを右にはめた。

エディがリュウトに声をかける。

「レフト、ライトとは何だ？」

は？

俺はなぜエディがそんなことをリュウトに尋ねたのかわからなか

った。俺は目でリュウトに尋ねる。

ふと周りを見ればこの部屋にいる全員がリュウトを見ていた。リュウトは一步僅かにさがりながらも答える。

「・・・僕らの世界にはそれぞれ違う言語があつて、レフトは左、ライトは右を表す言葉です」

そのリュウトの答えにエディがああ、と納得したように頷いた。

「そういえばリュウトの世界では言語が統一されていないのであったな」

「その言い方だとここでは言語が統一されてるのか？」

俺の問いかけにエディはそうだ、と答える。

へえ、それは驚きだ。そっちのほうが便利なので異論は無いが。

地球でもここみたいに言語を統一すりゃ楽なのに。何でわざわざ統一しようとしないのかねえ。地域ごとの文化が大事っつーのはわかるけど、それでも統一すべきだと俺は思う。それかせめて生まれたときから公用語をしっかりと教えるべきだ。

そうすりゃ英語なんて苦労せずに勉強できたのに！

あ、言語といえば俺は会話も読み書きもなんら不自由は無かった。といってもこの言語は日本語じゃねえよ？ どっちかつつーと英語に近い。だけど上記の通りなんら不自由はしなかった。

聞きなれない言葉でも、見慣れない文でも、簡単に理解できた。

ここの文字を理解するとき、ちよいとまだ違和感是否めないがその内慣れるだろう。

「で、もう一つの用事なんだが・・・」

がざごそと再び机を探るエディ。

俺はちらりと執事を見た。執事は何か探し物しているエディを見て百面相をしていた。多分、エディの代わりに探し物をしようかと逡巡しているのだろう。

せつかく執事がいるのに何で使おうとしないのかねえ。

「あつたあつた・・・。これに手を当てる」

机から探し当てた透明な水晶球を片手に、戻ってきた。

「了解」

俺はエディの持つ水晶球に右手を当てる。すると、水晶の中にもやもやとしたものが映し出された。

俺はそれに、何故か目が惹かれた。そのもやはだんだんと水晶の中に広がっていき、ついには水晶全体が曇ってしまった。

「これは何だ？」

水晶に映し出されるものに、俺はこれまでないような不安、それ

と同時にこれまでにないような安心感を感じている。

何だこの感覚は？ 気持ち悪いようで心地良く、心地良くないようで気持ち良い。感じているものが完全に矛盾している。

地獄と天国を同時に見ているとこんな感覚だろう。安心と不安、歓喜と恐怖、対立するはずの感情や感覚が入り混じる。

つい、と視線を他に向けると皆同じような表情をしている。困惑の表情だ。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

これが普通の反応のようだ。

俺は水晶から手を離す。同時に水晶に映し出されたものはぶつりと途絶え、元の透明な色に戻った。

ほう、とため息をつく俺を除くいた者達。

「で？」

「ん？・・・ああ、あれはな魔法の適性を調べるためのものだ」

前に記したとおり、魔法は誰でも簡単に使えるものではない。無属性魔法ならいざ知らず、属性魔法はその人その人の性格によって変化するようだ。

で、属性魔法の適性があるのを調べるのがあの水晶球らしい。

「結果は？」

エディはそこで何故か口をつぐんだ。俺は眉をひそめる。

「・・・何だよ？」

周りはむつつりと黙り込んでいた。・・・かなり不本意だが、ひたすらに嫌な予感しかない。

「・・・ユウスケ・・・」

エディが重苦しく口を開く。そして、告げた。

「お前は属性魔法は使えないみたいだ」

とてつもなく最悪な答えだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8428p/>

不良少年、●●になる

2011年10月8日10時30分発行